ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「衝動を抑えきれなかったから、ついカッとなってやった。本当に申し訳なかったと反省している……が、後悔はしていない」

　刹那、俺の後頭部を激しい衝撃が襲う。詠の拳だ。

　風呂から上がった――入浴中は、かなり気まずい雰囲気だったが――後、皆の前で、フローリングの床の上に正座させられた俺の第一声がそれだったのだから、詠のその反応は当然と言えるだろう。

　だが、考えても見て欲しい。あんな艶姿を見せられて、暴走しない男がこの世に存在するだろうか。いや、しない。

「裁判長。僕は実刑判決を望みます」

「あ～……そうは言ってもね～」

　裁判長と呼ばれたレイは、詠の求刑に「うーん」と首を傾げる。

　今、この部屋では初めて開かれた裁判が行われていた。言うまでもなく、さっきの俺の一件である。

　実刑判決ってさっきの一発じゃ駄目なのだろうか、という一言が漏れかかったが、俺はそれを喉の奥へと押しやった。下手なことを言ったら面倒なことになりかねん。

「いやー、私もさ、ロランの気持ちも分からんでもないわけよ。詠ちんの裸を見たら、私も暴走するし」

「『しそう』じゃなくて『する』なんですね……」

「詠ちゃん。それはもう、諦めた方がいいかな……？」

　ジト目でレイを見る詠に、樹葉は苦笑しながらそう言った。俺も同意見だ。

「だから私的には、ロランにも情状酌量の余地はあると思うわけね？　と言っても、お咎め無しってのは詠ちんが可哀想だとは思うわけよ。ってことで、明後日の遊園地で、ロランは私達に何か奢る。これでどう？」

「うー……まあ、いいでしょう」

　詠はやや不満そうではあるものの、一応は納得してくれたようだ。俺としては、何故詠だけでなく他の二人にも奢らねばならないのか少々疑問ではあったが、これまた下手なことを言って判決が厳しくなるのは避けたい。それに大して使っていないから、金なら結構余っているし、セクハラもといじゃれあいの罰としてはかなり甘めなものだと納得しておく。

うちで初めて開かれた裁判は、これにて閉廷となった。

と、そこで、だ。

「……ん？」

　俺は、ふと気がついた。先程のレイの発言についてだ。

　同じことを、詠も思ったらしい。俺達二人は目を合わせると、発言主に聞いてみる。

「なあ」

「明後日のことなんですけど……」

　見事なまでに同時に。

「ん？　どったの二人共？　声ハモらせて」

　気まずそうに口をつぐみながら互いに見合わせる、そんな俺達の何が面白いのか、クックックと笑いを噛み殺しながらそう言うレイ。

「いや、いつから遊園地に行くことに決まったのかな、と」

「い、樹葉は聞いていましたか？」

　少なくとも、俺は聞いた覚えが無い。それは詠も同じようだ。

　だが、レイと樹葉は『にへらー』というような擬音語が似合いそうな笑顔を見せて、こう言った。

「いや、折角ロランが帰ってきたんだし、今週末はパーっとやろうかな、と思ってさ。チケットもまだ有効期限切れてないし」

「さっき、二人がお風呂に入っている間に、レイちゃんと話し合ったの」

「二人共、明後日は予定とか無いっしょ？　そういうわけで一緒にゴー！」

　どうやら男性陣に、拒否権は無いらしい。

　そう悟った俺達は、はあ、と溜息を吐く。

それでも少し笑顔を見せていたのは、きっと俺達二人も楽しみだと思っているんだろうな。